

ウガンダから始まる国際理解教育

川上 誠

公文国際学園

◆担当教科：英語

◆実践教科：総合学習

◆時間数：12時間+α

◆対象学年：中学1年生(1人)+高校1年生(3人)

◆対象人数：4名(自由選択)

カリキュラム

<実践の目的>

「日本人としての自覚と世界市民としての自覚」

一般的に、開発問題は、生徒にとって遠い国のお話である。自分とは程遠い存在で、かわいそうだけれども、今の自分ではほとんど何もできないし、関わりもないと思っている。しかし、もうすでに同じ日本人で開発問題に関わっている人がいて、現地で実際に協働している人々がいることを紹介したかった。また、日本にいて、生活しているだけで、発展途上国に対して大きな影響を与えていて、現地スタッフをささえる仕事をしている人々の存在とその組織のようすを見て、加えて、国連機関で働く様子を見て、感じて欲しいと思った。最後に、日本人だけでなく、発展途上国の人々と世界中の人々が、大学院で学びあっている姿を見て、将来の自分を少しは考える機会を作りたかった。日本人として、これから継続していくべきことと、日本人の枠から超えて、同じ人間としてなすべきことを考えられることを目的におく。

授業の構成

10月14日(火)～10月17日(金)までの総合学習

基本的には、校内で朝9時～12時まで、ただし、2日間は校外学習ができる。

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1～3	ウガンダについて理解を深める。	① ウガンダの写真や産品から、ウガンダの国の概要や、文化、習慣などについて知る。 ② ドキュメンタリー映画の視聴を通して、ウガンダにおける少年兵士の問題について知る。 ③ 上記について、意見を述べ合う。	・ウガンダで撮影した写真 ・DVD教材 ・模造紙と付箋
4～15	地球上で起きている課題を自分の問題として考え、解決に向けて行動できる力を養う。	① 実際に国際協力の現場で活躍する人々を訪問し、話を聞く。 ② 外部講師を招き、債務問題について学習する。	・パンフレット ・ビデオ教材

授業の詳細

1日目：ウガンダについて理解を深める。

1限 ウガンダの写真や産品から、ウガンダの国の概要や、文化、習慣などについて知る。

①写真を使ってクイズ形式でウガンダを紹介

訪問先での日本人の活躍している様子とウガンダの人々について話した。(人口構成の中で一

番多い年齢が 14 歳であることや紛争とエイズについて、遺児が多いこと等)

使用した写真 (一部抜粋)



バックレー小学校 (障害児のための寄宿舎つきの小学校) 16 歳の小学生もいた。
このクラスは聾啞 (ろうあ) 学級 小学生にも進級テストがある。



ワグンブリジ中学校 (私が交流授業をした学校)。この村は、ウガンダ太鼓発祥の村。



地域女性センター
ワイン (食前酒) も製造している。マイクロ・ファイナンスも導入している。利子は月に 5% とのこと。
エイズ遺児を養っている地域のおばあさんの家に連れて行ってくれた。



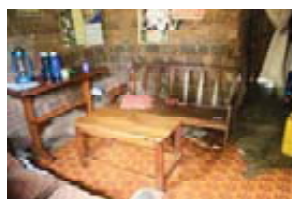
この人は、エイズ遺児を養っているおばあちゃん。娘さんがエイズで亡くなった。



おばあちゃんの家



孫たちで、エイズ遺児



この家のリビング このリビングの左側の壁の向こうが右写真の鳥小屋 (家の建物内)





バナナ (ウガンダの主食)



キャッサバ (根の部分が食べられる)



コーヒー

どこの国でもほぼ同じく、都市にはスラムがあって、田舎はゆったりしている
庭先にバナナやキャッサバがあり、コーヒーも植わっている。

ここに、現金収入が得やすいお米も植えられるように考えているのが Mr. Nerica (New Rice for Africa)
の坪井さん。



首都カンバラで会った ICBL 大使マーガレットさん
彼女はマイクロファイナンスを勧めない。



Mr. Nerica 坪井さん

ワグンブリジ村の太鼓作り



木で形を作る



胴の部分を塗る



ヤギや牛の皮を干す



地方のマーケット



バナナを運んでいるトラック



ウガンダ料理
お米 キャッサバ マトケ (バナナ)
その他の野菜 牛のシチュー



携帯電話会社の宣伝
ペンキ塗りの費用を会社が出してくれる。セルテル・ウガンダは、Zain グループの一つ。

②ウガンダの中等学校で行った交流授業を紹介

本校で行った日本文化体験をウガンダの中学生にクイズ形式で見せたことを伝えた。
(茶道・捕鯨・忍者・讃岐うどん・乳業・飴細工の6コース)

③ウガンダの少年少女の将来の夢について紹介

ダンサー・歌手・ドラマー・ドラム製作者・DJ 等

- 所感：生徒の反応は悪くない。ただし、たくさんのことを伝えているので、未消化な部分がほとんど。自分たちがしたことを紹介されたり、年齢が近いので、集中して聴いている。

2限 ドキュメンタリー映画『Invisible Children』の視聴を通して、ウガンダにおける少年兵士の問題について知る。

①『Invisible Children』は、アメリカ人の大学生が2003年にウガンダ北部でみた紛争と児童兵士の様子を伝えたドキュメンタリー映画。

3限 Invisible Children を観た後の、シェアリングを行う。

①付箋に其々感じたことを書き出し、模造紙に貼っていく。その後、感想や意見を述べ合う。

●所感：生徒たちは、悲惨さや伝えることの大切さを意見として出していた。一人、ほとんど、意見が言えない生徒がいる。どう対応するか考えることにする。

2日間連続の校外学習の案内をして、1日目終了。

2日目：地球上で起きている課題を自分の問題として考え、解決に向けて行動できる力を養う。

9:30～11:00 JICA 横浜 河野裕之さん（元青年海外協力隊（ザンビア：青少年活動））訪問

ポーランドからの協力でできたカシシ孤児院でストリート・チルドレンの世話をしていた河野さんの活動を紹介してもらった。ヴィクトリアの滝での雨季・乾季の写真もあり、アフリカの大きさを感じられた。生徒たちは、まだ元気で質問に答え、また、質問もできていた。

12:30～13:15 参議院会館 広中和歌子議員（元環境庁長官・Japan as No.1 訳者）訪問

早い時期にマイクロ・ファイナンスを日本に紹介された方。2006年にノーベル賞を受賞したユヌスさんやマイクロ・ファイナンスについてうかがう。留学や翻訳や国会議員になることについて、何が大切なのか質問すると、「自分で動きだしてみる」と答えられ、また、ボランティアについては、友人の言葉として、「生きているうちに自分の住んでいる世界が a little bit better（ほんの少しでも良くなる）になってほしい」と伝えてくれた。

生徒たちは緊張していたが、勇気づけられ、質問もできていた。



広中和歌子参議院議員

マイクロ・ファイナンスを初期のころに日本に紹介した元環境庁長官 Japan as No.1 の翻訳者

13:30～15:00 外務省訪問 山崎潤子外務事務官訪問

30分ほど資料を使った外務省の仕事についての説明。40分ほど外務省内見学。第2国際会議場や大臣が記者団に話をする場所、記者たちが仕事をする場所等を見せていただいた。残りの時間をODA等に対する事前に提出していた質問に別の係りの方に答えていただいた。生徒たちは、通訳席が2階に備わった国際会議場やテレビでみたことのある背景が世界地図になっている会見場を見て喜んでいた。一番、元気な時間だった。事前質問に関しては、やや機械的な返答になっていて、子供扱いされていて、いたしかたないと思いつつ、少々期待はずれだった。



外務省会見場は、世界地図が背景

15:30～16:30 世界銀行東京事務所 大森功一さん訪問

最初の40分間、1階で世界銀行の説明と事前質問についての返答をしていただく、その後、10階にある事務所と国際会議場ができ、研修・講義が受けられる東京開発ラーニングセンターを見せていただいた。最初に話の部分が来て、もうすでに疲れ始めていたので、生徒はあまり集中できていなかった。一日に回するには多すぎたと反省している。

3 日目：地球上で起きている課題を自分の問題として考え、解決に向けて行動できる力を養う。

10:00～12:30 早稲田大学訪問

10:00～10:40 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 山口博之事務長訪問

国際機関で働くまでの方法について話をうかがう。どの位の時間がかかって、何をしたらよいかうかがえ、生徒にはイメージがわいたようである。

10:50～12:00 早大ボランティアセンター訪問

大学生による国際ボランティアの実例を大学生よりパワーポイントで説明していただき、最初フィリピンのゴミ対策をした「ゴミレンジャー」のお話と次にルワンダでの学生交流「ルワンダプロジェクト」(小峰茂嗣早大客員講師・ARC (African Reconciliation Committee:アフリカ平和再建委員会) 事務局長同席)のお話をうかがった。大学生と生徒の年齢が近いので、親近感をもって話を聞いていた。また、大学生側が、興味を引くように作ってくれていたと思う。

12:10～12:30 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 阿部義章教授訪問

阿部氏は日本人で最初の世銀局長になった人であり、授業の最後の時間を少しだけ見学させていただき、大学院生と自己紹介をした。英語での授業だったので、生徒はほとんど内容を理解できなかったが、阿部教授より、受講している大学院生は世界各地から各国政府の役人や NGO をしているひとやら国連機関を就職先に考えている人やいろいろいるとうかがう。生徒側から自己紹介をすることになり、大変緊張していたが、一人は、英語で自己紹介をすることができた。10人少しの大学院生がいたが、日本人は一人しかいなかった。ほぼ全員が環太平洋の国々から来た留学生だった。授業が終わって、我々と阿部先生が残り、阿部先生に質問をしてみた。世界銀行の構造調整についてうかがうと、世界銀行内部でもいろいろな意見があり、先生自身も意見を出していたとのこと。先生のほうから、世界銀行に就職したいなんて考えるのではなく、やりたいことが世界銀行にあるから働きたいといえるようになったほうが良いと発言があった。自分がやりたいことをどこで出来るか探ることが大事とのこと。先生自身は、数学が得意で就職するなら人の役に立つことをしたくて、両方を考えると経済学が自分の進むべき道と考え、留学した大学院から世銀に就職され、経済学を教えることもしたいことだったので、進路を変えたとのことだった。自分のやりたいことをしなさいとのメッセージと英語も好きなものを英語で読んで勉強しなさいとアドバイスがあり、生徒たちには難しく考えるのではなく、得意なものを伸ばしていくのが良いと言われ、気が楽になったようである。

14:00～15:00 ユニセフ・ハウス見学

ユニセフの活動を展示してあるのをボランティアの方から説明を受ける。保健関係や地雷・少年兵士に関する展示品があり、手に取ることができるものも多い。日本にいと日常にはないものが多く、生徒にすると手に持って感じるが多かったようである。



ユニセフハウスの展示物

自動小銃のレプリカ 地雷の展示物 金属探知機に見つかりにくいプラスチック製もある

15:30~16:00 ウガンダ大使館 ビリグワ大使訪問

ビリグワ大使は、高校卒業後、留学し、アメリカで働いていたが1984年からウガンダにもどって民主化運動に関わり、現大統領ムセベニ氏が大統領になった1986年からコーヒー協会のマネージャーとなる。当時は構造調整が行われていて大変な時期に就任している。ウガンダのムセベニ大統領は、エイズの危機を最初に世界に向けて報告した大統領で、エイズ対策がたいへんうまくいったことで知られている。また、ウガンダは構造調整の優等生とも言われている。その後、ビリグワ大使はセルテル・ウガンダ（携帯電話会社）を5人で設立し、その後、モー・イブラハム博士が資金と技術を持って加わっている。イブラハム博士は、イブラハム賞を創設して、アフリカ全土を民主化する活動を行っている。電話が普及する前に、携帯電話が普及している。電柱や電話線を必要とせず、情報を得ることができるようになった。今後も、ICT（情報通信技術）の発達から、E-learningやDistance Learningが期待できる。生徒たちは、初めてアフリカの人と接することになりかなり緊張していた。話の内容も普段の生活からかけ離れているので、質問もほとんど出なかった。ただ生徒たちに後で聞いてみると、一番印象が深かったのはビリグワ大使訪問であった。



ウガンダ大使館にて
ビリグワ大使と記念写真

4日目：日本にあるNPO法人の役割を知り、国際問題の難しさを日本人として、世界市民として捕らえなおして見る。

- 1限 前日までの校外学習の振り返り 前日までに訪問した方々のことをみんなで考えてみた。生徒によって大変詳細なことまで覚えていることもあるし、ほとんど覚えていないと言いがら、話をしていると思いだしてくるといった具合だった。
- 2限 債務問題 参加型学習 講師：アジア太平洋資料センター理事 普川容子さん
債務が膨らみ、構造調整を受け入れると、一般市民の生活がいかに苦しくなったかを資料「280億円はたったの4日分でしかない」で確認しながら学習する。
- 3限 2限に続いて、ビデオ「死を招く債務」で学習する。驚くほど内容にインパクトがあったようである。レポートの提出を宿題に課して終了となる。

成果と課題

日本人としての自覚と世界市民としての自覚を感じてほしいと思って、この総合学習のコースを計画した。生徒一人ひとり感じるが多かったと思う。同じ年代のウガンダの生徒たちの様子を伝え、人間として自分たちとほとんど何も変わらないことを感じられたと思う。また、歴史や環境の違いを理解してもらえたと思う。日本の枠を超えて人々を助けようと頑張っている日本人、そして、自分たちで自立していこうとするウガンダ人、間接的に、直接的に、実際に関わっている人々との短いながらも交流ができたことは、生徒たちにとってかけがえのない経験となった。また、少数の生徒たちのために貴重な時間を割いてくださった関係者に対して、私は大変感謝し、また、見習わなければならないと強く感じた。この機会を大切にして、この経験をもとにさらに知見を深めようと考えている。

参考資料

- ・吉田栄一 『アフリカ開発援助の新課題』 アジア経済研究所
- ・『アフリカハンドブック』 アフリカ協会
- ・黒田一雄・横関祐見子 『国際教育開発論』 有斐閣

追加授業

理想の国作り ウガンダ編		川上 誠 公文国際学園
◆担当教科：英語	◆実践教科：道徳	◆時間数：35分
◆対象学年：中学2年生	◆対象人数：166名	

カリキュラム

【実践の目的】

3月に国際理解デイズが本校で行われ、中等部1年生と2年生は、『理想の国作り』のプレゼンテーションをすることになっている。具体的な国作りの例として、ウガンダ大使のビリグワ氏のお話をうかがい、エイズ遺児として学業を続け、早稲田大学国際教養学部合格したロナルドさんのお話をうかがい、ウガンダでエイズ遺児のサポートをしているあしながウガンダでボランティアを一年間してきた日本人女学生、阿部幸子さんの話をうかがう。

授業の構成

12月11日（木）14:50～15:25の35分間の道徳の時間
当日は、ビリグワ大使が公文式学習を見学に来る予定であった。

授業の詳細

1. ビリグワ大使の民主化運動の話をうかがう予定であったが、前日に連絡が入り、見学は延期となった。
2. 私が、第一次世界大戦と第二次世界大戦から、アフリカ諸国の独立、そして、ウガンダの歴史の概略を話した。アミン大統領時代の虐殺の規模が、日本の広島・長崎での原爆での死者数と東京大空襲での死者数を足した人数に匹敵し、国作りがうまくいかないことは戦争をしていることと変わらない結果を生みだしかねないことを伝えた。
3. 日本は少子高齢化社会だが、ウガンダで一番多い年齢層は14歳で、遺児が多くいることとその原因はエイズと国内紛争であることを伝える。中2の生徒は13歳と14歳であるので、少しは身近に感じられたようである。
4. あしなが育英会の沼さんの通訳で、ロナルドさんのお話をうかがった。勉強を続けていくことの困難な状況と大学進学ができるようになったときの喜びを伝えてくれた。また、将来は政治家となり人々の役に立ちたいとお話をしてくれた。
5. 阿部幸子さんはあしながウガンダでの活動を写真で見せて話してくれた。寺子屋活動をして、学習の援助をしている。
6. 短い時間であったが生徒からは大きな拍手が起こり、一所懸命に生きていくことに価値があること、そして、それをサポートすることの意義に気づいてくれた生徒もいた。

成果と課題

世界銀行でのセミナーであしながウガンダの活動を知り、それを生徒につなげることができた。ビリグワ大使がいたら、時間的に無理が多すぎたと思われる。もっと計画を絞っておいたほうが良かったかもしれない。



授業風景



公文国際学園へのメッセージをくれたバックレー小学校の皆さんへ、お返しのメッセージ

